

## 令和3年度 第3回新潟市食育推進会議

日 時：令和3年12月9日（木）午前10時～

会 場：新潟市ふるまち庁舎4階 401会議室

司 会	<p>ただいまより、令和3年度第3回新潟市食育推進会議を開催いたします。 開催にあたり、新潟市農林水産部食と花の推進課長の坂井よりご挨拶申し上げます。</p>
坂井課長	<p>おはようございます。本日は12月のお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。いよいよ食育推進計画も素案ができて、皆様のおかげだと思い改めて感謝申し上げます。これまでも、資料の確認などで皆様からメールなどでいろいろなご意見をいただきました。その点につきましても、重ねて御礼申し上げます。今日は今年度最後の会議となりますので、この会を受けて素案を作りまして、年明けにパブリックコメントを市民の皆様に頂きまして、その後、議会に報告し、最終的に市長答申という形になってまいります。実質的な最後の会議になりますので、本日もぜひ活発なご意見を頂ければありがたいと思っております。よろしくお願いいたします。</p> <p>大変失礼いたしました。3月に最終確認の会議があるということですので、外に出る前の最終的な会議ということになります。よろしくお願いいたします。</p>
司 会	<p>ありがとうございました。本日の進行を務めさせていただきます食と花の推進課の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。</p> <p>本日の出席者については、お手元の座席表にお示ししておりにしております。佐藤委員、真保委員、長谷川委員が本日欠席となっております。また、関係課については、新型コロナウイルス感染症を考慮し参加を控えさせていただいておりますので、関係課に質問などがありましたら、後日、照会し回答させていただきますので、よろしくお願いいたします。</p> <p>続きまして、議事に入る前に2点確認させていただきます。1点目は、配付資料についてです。本日、座席表、資料3『食育に関する市民アンケート調査』へのご協力のお願いを配付させていただいております。事前にお送りしました資料と合わせて、不足の資料はございませんでしょうか。</p> <p>2点目は、会議の録音についてです。当会議は公開となっております。後日、ホームページ等で議事録を公開するため、会議の録音をさせていただきますので、ご承知おきください。</p> <p>また、本日は取材の申込みはございません。傍聴席には松井委員の付き添いでイオンリテールの芳村様がいらっしゃっております。</p> <p>これより次第に従い議事を進行いたします。ここからは村山会長より議事を進行していただきます。よろしくお願いいたします。</p>
会 長	<p>皆様、おはようございます。本日はお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日のメインは次期の計画の、途中ですけれども、確認と、アンケートにつきましては、最終確認になりますので、よろしくお願いいたします。</p>

	<p>まず、議事（１）「今後のスケジュールについて」事務局よりご説明をお願いします。</p>
事務局	<p>事務局の春川です。</p> <p>資料１をご覧ください。計画策定に関する今後のスケジュールについて説明させていただきます。まず、本日 12 月 9 日、第 3 回の食育推進会議となっております。本日は、第 4 次計画の骨子の素案の中身を中心にご意見いただきたいと思っております。12 月下旬から 1 月上旬にかけて、食育に関する市民アンケート調査を実施しまして、皆様からのご意見と調査の結果を計画素案のほうに加筆修正しまして、1 月下旬から 2 月下旬にかけて、市民の皆様にはパブリックコメントを実施します。広く市民の皆様から計画骨子に関するご意見を募りまして、そこで頂いたご意見を基に再度修正を行って、計画最終案を作成し、3 月の市議会で報告の後、3 月の中旬の第 4 回目の食育推進会議で皆様にご確認いただいて、市長への報告、新規計画の決定という流れで今後進んでいく予定です。決定まで残り 3 か月半となりますが、どうぞよろしくお願いいたします。</p>
会長	<p>ありがとうございました。</p> <p>ただいまの今後のスケジュールにつきまして、ご意見、ご質問がございましたら、お願いします。</p> <p>特にないようでしたら、次の議題に移ります。議事（２）「第 4 次食育推進計画骨子（案）について」の中で、こちらは冊子になっておりまして、少しボリュームがございますので、2 つのパートに分けて進めたいと思っております。この中で、まず第 1 章、第 2 章について、第 1 章が「計画策定にあたって」、第 2 章が「食をめぐる現状と課題」ということですが、これにつきまして、事務局よりご説明をお願いします。</p>
事務局	<p>資料 2 の計画の素案をご覧ください。これまで、昨年度から皆様からご意見を頂いた中で、素案という形で作らせていただきました。まだ不完全なところも多々ありますが、第一弾というところで、皆様からご意見をいただきまして、それを中身に反映させて、適宜修正を行っていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。</p> <p>まず、第 1 章と第 2 章の「計画の策定にあたって」と、「食をめぐる現状と課題」ということで、第 3 次計画の評価の中身の部分を説明させていただきたいと思っております。1 ページ目をご覧ください。計画策定にあたって、計画策定の趣旨になります。ポイントを絞って説明していきたいと思っております。国や市では、さまざまな食の問題が顕在化する中で、国では食育基本法、新潟市では食育推進条例、食育推進計画を作って食育を進めてきました。新潟市は日本有数の農業都市であり、身近に生産される米をはじめ、多種多様な野菜や果物、日本海でとれる新鮮な魚のほか、食卓を彩る花など、健全な食生活を送れる豊かな環境に恵まれています。しかしながら、生産者と消費者の距離の拡大、食への関心の希薄化など、食に関するさまざまな課題が見られます。そのため、行政等の関係者が連携しまして、これらの課題に対して総合的、計画に取り組んでいくことが重要となっております。本計画は、第 3 次計画策定後の 5 年間の取組みを総括し、取組みの成果と課題の整理を行い、食育が市民の皆様理解され、より一層関心が高まり、実践へと結びつくことを目指して、政策を総合的かつ計画的に推進するため策定します。</p> <p>続いて、2 ページをご覧ください。施策についての基本的な方針になります。こちらは今までの計画にも記載されていたものになりますが、本計画では新潟市食育推進条例</p>

に明記されております基本理念と、施策の基本となる事項を踏まえて、食育推進に関する施策を講じるものとします。基本理念は、以前にも皆様に見ていただきましたが、食育推進条例第3条の中にあります4つになります、心身の健康の保持・増進、豊かな人間性の形成、感謝の念の醸成と、自発的な意思の尊重、家庭が重要であるという認識のもとでの関係者の有機的な連携、特に子どもたちに対する積極的な取組、生産者と消費者との交流による地域の活性化や環境と調和のとれた職業の生産消費という4つが、食育推進条例の中での基本理念として明記されております。

施策の基本となる事項としては、家庭における食育の推進、学校、保育所等における食育の推進、地域及び職場における食生活改善のための取組の推進、地域の力を生かした食育の推進、生産者と消費者との交流、地産地消の推進、食文化の継承のための支援、食育の普及啓発等。この①から⑧までの事項において必要な施策を講じるものとするというふうに、食育推進条例に定められております。

続いて、3番の計画の位置づけですが、本計画は食育基本法第18条第1項に基づく市町村食育推進計画として位置づけられるもので、市として、今後の食育推進の方向性を定め、国、県と協力しながら、関係施策を総合的、計画的に推進するための計画とします。また、本市のその他の関連計画と整合性を図りながら実施していきます。計画期間は5年間になりますので、令和4年度、来年度を初年度としまして、令和8年度を目標年度とする5年間の計画として策定していきます。なお、計画期間中に社会経済情勢の変化などが生じた場合には、必要な見直しを行うものとします。

ここまでの第1章の計画策定にあたっての部分になりまして、続いて第2章です。「食をめぐる現状と課題」ということで、新潟市の現状と第3次計画の評価を踏まえて見えてきた課題についてまとめたものが第2章になります。第3次計画の中身に、グラフなどがあまりなかったのですけれども、あえてグラフなどをつけて、見やすいようにしたいと思い、今回からいろいろ加えさせていただいております。まず、本市の現状と特徴というところで、人口および世帯構造を記載しています。新潟市の人口は、平成17年の81.4万人をピークに減少傾向にありまして、65歳以上の高齢者の割合は令和2年度に29.8パーセント、令和27年には38.6パーセントに達する推定となっております。人口が少しずつ減少しておりまして、15～64歳や0～14歳の若い年代の割合も年々少なくなっている状況です。

下は一般世帯数になりますが、一般世帯数は年々増加しております。人口は減っておりますが、世帯数は年々増加しております。令和2年度には33万世帯を超えましたが、世帯数は増えているのですけれども、一世帯当たりの世帯人数は年々減少を続けています。生活環境の変化や少子高齢化により、核家族世帯及び単独世帯数が増加しています。従来、家庭で担われてきた食文化の継承等の希薄化が懸念され、栄養バランスを意識した外食や中食の利用、地域での共食の推進など、家庭のみならず、各関係者間で連携した食環境の整備が大切となってきております。一般世帯の家族類型の推移ということでグラフをつけております。核家族と単独世帯が少しずつ増えていっている状況です。令和2年度の核家族以外の世帯の数値はまだ出ていない状況ですので、まだ記載されておりません。新潟市の農業に関連したデータもここに付け加えていきたいと思っております。

す。

新潟市の現状としてまずお示しさせていただきまして、続いて、第3次計画の評価に入っていきます。第3次計画は「にいがた流食生活の推進」を施策の柱とし、市民の望ましい食生活を実践していくために必要な取組みを明確にするために、「えらぶ」、「つくる」、「たべる」、「育てる」という4つのテーマと、それぞれに付随した目標を設定して、食育の推進に向けて取り組んできました。施策展開の視点など、これまでもご説明させていただいておりましたが、食育に関心がある人がより実践につながれるように、体験機会の充実を図るということと、体験機会の対象やテーマをもっと若い人、課題が多い世代にどのように明確化するかということ。また、体験機会を与えるための人材の育成確保という3つを第3次計画の施策展開の視点として取り組んでまいりました。

続いて、(2)は第3次計画の指標の達成状況となります。黄色の部分、これからアンケート調査をしてから確定する数字になるので、あくまでも現時点で分かっている数字で、仮に書かせていただいております。評価もそのようにさせていただいております。評価に関して、「えらぶ」、「つくる」、「たべる」、「育てる」の4つのテーマに分けて、次のページから評価を行っております。まず、テーマ①健康や環境に配慮しながら、自らの食を「えらぶ」ことができるというテーマと、そこに関連してくる指標の評価になります。まず、食（食事や食習慣）への関心度ということで、こちらに関しては策定時からほぼ変化がありません。特に20歳代で最も関心が低く、これから親世代となる若い世帯の食への関心を高めていくことが重要となっています。

その下の生活習慣病予防や改善を意識した食生活の実践度になりますが、こちらも20歳代、30歳代の若い世代で低くなっています。20歳代、30歳代の若い世代はまだ体に影響が出ていない年齢でもあるので、意識は低くなってしまおうかなと思うのでうけれども、そういった影響が出始める前の子どもや若い年代の頃から意識せずとも主体的な行動を実践できるように、引き続き、啓発を行うことが必要です。

地産地消の実践度ですが、こちらもほぼ変化がありません。身近な場所でとれた食材を選ぶ市民の割合という指標ですが、こちらは変化がほぼなく、特に20歳代において選ぶようにしていると回答した割合が低くなっています。

食べ物を無駄にしないための行動の実践度になりますが、こちらも策定時とほぼ変化がありませんでした。食品ロスの削減の必要性を理解して行動して、食を大切にすることを感謝の念ともったいないという気持ちを育てることは、持続可能な食の推進に不可欠であり、具体的な行動例を示しながら、こちらも引き続き、普及啓発を図る必要があります。ただ、こちらに関しては若い世代のほうが実践しておりまして、60代以降の高齢者のほうが食べ物をむだにしないための行動の実践度が低いという結果でした。

食品の安全性に関する知識を持ち、判断できるかというところですが、こちらは20歳代、30歳代の若い世代においては現時点で目標を達成しております。全世代においても、策定時から改善傾向が見られました。ところどころ、コラムについてという欄があるのですけれども、コラムについてもいろいろ記載していこうかと思っております。

続いて、テーマ②食文化を受け継ぎながら、自ら「つくる」ことができるというテーマ

マです。学校給食における地場産物使用割合ですが、こちらは策定時より悪化しています。年々減少傾向にあります。学校給食は子どもたちの食や食文化への関心を高める貴重な生きた教材でありますので、学校給食を活用した食育の推進を図っていきたく思います。それが地場産率だけで見るのではなく、学校でどのように生かしていくかという視点も踏まえ、第4次計画では進んでいきたくと考えております。

食文化の継承についてですが、受け継がれてきた料理や作法を大切だと思う市民の割合、受け継がれてきた料理や作法を受け継いでいる市民の割合の2つが指標でしたが、どちらもほぼ変化がありません。30歳代から50歳代の子育て中の世代においては大切だと思うと回答した人の割合が8割以上いたものの、実際に受け継いでいるかという質問に対しては、5割弱ということで、割合が低くなっています。核家族の増加だったり、地域コミュニティの希薄化により、受け継ぐ場面そのものが消失していると考えられますので、本市の食材だったり、食文化にかかわらず人材と連携した取組みによって、さまざまな場面での普及啓発を図ることが食文化の継承につながっていくと考えられます。

食育マスターの派遣事業の実施回数です。令和元年度に制度変更になったことにより、派遣制度がなくなりましたので、こちらは評価不能となりました。ただ、地域での食育活動がより広がりますように、食育マスターと連携を図りながら、地域における食育推進事業においては引き続き取り組んでいきたく思います。

拠点施設である食育・花育センターにおける食育の事業の実施回数ですが、目標を大きく上回って達成しました。今後も引き続き実施を進めていきたく思います。

続いて、テーマ③生涯にわたって健康で楽しく「たべる」ことができるということですが、主食・主菜・副菜のそろった食事です。こちらは、全体及び20歳代、30歳代において策定時より向上しております。ただ、ほかの年代と比べると20代から40代までにおいて、1日3回以上バランスの整った食事をしている人の割合は低くなっておりますので、若い世代はバランスが崩れやすい傾向があることが分かります。単独世帯が増加していきますので、すべて自炊として考えるのではなくて、外食や中食においても望ましいバランスの整ったメニューを選択できるように、普及啓発を引き続き図っていきたく思います。

ゆっくりよく噛んで味わって食べる市民の割合になりますが、現時点では目標を達成することができております。口腔機能の改善や維持については、子どもたちからの実践を促す取組みも今後は必要です。

朝食の欠食については、20歳代、30歳代ではほぼ変化がなく、小学生、中学生では悪化してしまっている現状です。年代が上がるにつれて、朝食をほとんど毎日食べると回答する市民の割合は増加しておりますので、若い世代、20代から40代において、具体的な実践に結びつくように普及啓発が必要となっております。悪化してしまっている小中学生は、成長期でもありますので、朝食の摂取は極めて重要です。特に子育て世代でもある30歳代、40歳代の欠食については、子どもたちにも影響を及ぼすと考えられますので、家庭のみならず、学校や企業との連携を図りながら、朝食摂取についてはさらなる啓発が必要だと考えられます。

続いて、共食についてです。共食を大切だと思う市民の割合、及び共食の回数についてはほぼ変化がありません。現在、コロナの影響で黙食をしております、黙食によって食の楽しさが失われる懸念もありますが、食を楽しむための家族や友人、知人等との共食の役割は重要となっております。新しい生活様式を考慮しながら、共食の大切さがより浸透するように図ることが大切です。

最後に、テーマ④にいがたの誇る豊かな食と農の体験を通じて生きる力を「育てる」です。農林漁業体験の経験についてですが、こちらも策定時からほぼ変化がありません。農林体験学習を実施している小学校の割合は、策定時から100パーセントということで目標を達成できました。今後は、生産者、保育所、学校、関係団体と連携をとりながら、より体験が市民へ浸透するように図るとともに、児童に対しては、何パーセントの学校が農林体験学習を実施していたかというものから、次の計画では、児童自身が本市の農業への誇りが醸成されたかという成果指標のもとで、さらなる普及啓発に取り組んでいきたいと思っております。

食育ボランティアについてです。食に関する専門家を食育マスターとして登録して、各関係団体への食育活動や講師として紹介しています。こちらの人数も指標に入っておりますが、令和元年度の制度変更に伴い登録者数が減少してしまいました。地域での食育活動がより広がるように、人数で見えるのではなくて、地域での活動をより活発化できるようにPRや積極的な活用を促していくことが大事だと考えております。

これら4つのテーマに分けて、それぞれの指標を評価し、17ページの今後の展開に向けた課題につながっております。第3次計画では、再掲を除いた18指標、22項目について、計画策定時と最新値を比較しました。目標を達成したものを4項目、改善結果を±1割以上の改善が見られたものを改善傾向があると判断しておりますが、こちらが3項目。変わらなかったものが11項目。±1割以上悪化しているものが3項目。評価できないというのが1項目になっております。全体で見ると、約3割の項目に改善が見られました。第3次計画の成果としては、拠点施設等における食育事業の実施回数や農業体験学習を実施している小学校の割合など、体験機会の提供に関しては目標を達成できました。食品の安全性や主食・主菜・副菜のそろった食事の頻度等に関する項目においても、目標達成または改善傾向が見られます。これらは自身の健康に直結する項目でもありますので、さまざまな機会での広い普及啓発により、市民に少しずつ浸透してきたのかというふうに考えられます。第3次計画で得られた課題としては、学校給食での地場産物使用割合やこどもの朝食欠食において、第3次計画よりも悪化しております。給食を生きた教材として活用して、子どもの食の関心向上や朝食摂取率向上へより一層取り組んでいくことが必要です。また、これから親となっていく20歳代、30歳代を中心として、食への関心や朝食摂取率等が低い結果が出ておりますので、食育施策が若い世代へ届いていないと評価されます。地産地消、食品ロス、食文化の継承等の環境に配慮した行動についても改善が見られませんので、持続可能な社会の実現に向けて、食育の観点からも引き続き推進が必要になっております。

これらを踏まえまして、第4次計画では、大学生や働く世代、子育て世代等を中心とした無関心層に対して幅広い分野である食育のうち、1つでも楽しいと感じることから

	<p>関心の向上を目指したいと思います。本市の目指す食育について市民目線で分かりやすく実践につながる具体的な普及啓発により、さらなる浸透を図ります。新たな日常において、デジタル技術を活用し、日々の時間的ゆとりのない中でも負担なく、主体的に食育を実践できる人を育てる取組みを推進していきたいと思います。</p> <p>第1章の計画策定にあたってと、第2章の新潟市の現状と第3次計画の評価のところをこのようにまとめさせていただきましたが、いろいろなご意見を皆様から頂いて、加筆修正を行って作り上げていきたいと思いますので、データの示し方だったり、評価の視点だったり、言葉そのものでもいいですし、何かありましたら、皆様からご意見を頂きたいと思います。よろしく願いいたします</p>
会 長	<p>ありがとうございました。</p> <p>それでは、委員の皆様からご意見を頂きたいと思います。ご質問あるいはコメント、ご意見、修正案など何でもけっこうですので、第1章と第2章についてお願いいたします。</p>
村井委員	<p>すごく分かりやすく、よくまとまったなど、今お聞きして思っています。分かりやすく、各項目についてもグラフがきちんと出ていますので、非常に人口が把握しやすいと思います。1つ気づいたのは、今後の展開に向けた課題のところ、各目標の達成度が出ていて、成果・課題、第4次計画に向けてという文章になっているのですが、例えば悪化傾向、あるいは改善しているというものが全体でももちろん出ていて、見れば分かるのですけれども、やはりこれを観る方がもう少し分かりやすく、例えば目標達成した4項目というのが前のテーマの、これとこれとこれですよというのがすぐ分かるような図表なり、あるいはグラフなり、そういったもので出ていると、本市が抱えている課題とか、達成しているプラスの状況とか、そういったものが一般の方に非常に分かりやすいのではないかと思います。せっきく前のグラフが非常に分かりやすいので、そこをもう少し工夫していただけたらと思います。</p>
会 長	<p>ありがとうございます。17ページの上のA、B、C、Dの項目の内訳を記載したほうが良いということですね。</p> <p>ほかにはいかがでしょうか。</p> <p>皆さんがお考えの間に私から何点かお伺いします。7ページのここに最初にA、B、C、Dが出てくるので、その基準が後から出てくると少し分かりにくいので、下のほうにでもいいので、A、B、C、Dの基準を入れていただければと思います。</p> <p>8ページからのデータがいつのデータなのかがないのです。まとめてどこかに書くのか、いつの市民アンケートなのかとかということを書いていただくと。</p> <p>増加しているとか、していないという記載があるのですが、それが図になっていたほうが私は分かりやすいかなと。年代別もいいので、変化と年代別が両方載っているものと、年代別だけのものがある、変化と年代別を両方載せていただくと、文章と照らし合わせて確認できるのではないかと思います。7ページの表を見れば分かるかもしれないのですが、図で、文章中にあるものは示していただけるといいのではないかと思います。</p> <p>策定時といっているのは、第1次かなと思ったら第3次なのですね。第3次策定時か</p>

	<p>ら入れるのか、少し迷ったところがあるので、返答いただければと思います。</p> <p>12ページの、食育マスターの制度の変更により評価不能となりましたというのが、私たちは聞いたから分かるのですけれども、多分、何だろうなど、初めて見た人は分からないと思います。派遣制度がなくなったからカウントできないということですよ。むしろ、それをはっきり書いたほうがいいのではないかと思います。</p> <p>同じく12ページの、実際数の目標が200回なのですよ。目標200回と書いたほうが、目標は何だったかと前のほうを見にいかないといけないと分からない。</p> <p>14ページの朝食の摂取頻度、右側のこどもの図は、増えています。</p>
事務局	ここは記載ミスです。すみません。摂取頻度ではなく、欠食率になります。
会長	これも市民アンケートですか。
事務局	こちらは、教育委員会のほうで小中学生を対象に毎年とっている、生活・学習意識調査というものが出典になります。
会長	これは記載したほうが良いと思います。 今、気づいたのは、こんなところです。 ほかの委員の皆様からもぜひお願いします。
宮川委員	<p>2点お願いします。私も説明を聞きながら、そうだなと思いながらお聞きしていました。分かりやすくなったのではないかと思います。</p> <p>まず17ページの(3)ですけれども、このページ全体を見ると、課題だけではなくて成果も挙げていますよね。そうしましたら、このタイトルは「今後の展開に向けた成果と課題」と入るのではないかと私は感じました。</p> <p>9ページですが、これは自分のこととしてすごく考えたのですけれども、食べ物を無駄にしないための行動の実践度。確かに若い世代の人たちがロスをなくしているというか、高齢者に少し問題があるということが、ここですごく分かるのですけれども、ここにコラムとあります。あとでお書きになるのだと思いますが、今の段階でよろしいので、ということが原因として考えられると事務局ではお考えか。その辺をお聞きしたいと思います。</p>
事務局	食べ物をむだにしないように行動しているかという質問に対して、その理由だとか、そこら辺まで分析というか質問をとってなくて、現時点では分からないところあります。申し訳ありません。
宮川委員	<p>ここは別に、アンケートから分析したことを書かなくてもいいのですよね。こちらのほうで、こうではないでしょうかとか、あるいは提言できるようなことを書いてもいい場所になるでしょうか。私は考えるのですけれども、若い方というのは、冷凍技術とか電子レンジをうまく使ったり、ドライしたりとか、そういった情報がとても豊富にあると思うのです。また、体も動くし、頭も動くので、そういったことを駆使して、特に食に関心ある若い人たちはそんなふうにしてロスを削減している傾向があるのではないかと思いますけれども、私のように年を重ねた者は、むだにはいけないという思いはあっても、むだにしないための、例えば真空にするとか、ドライにするとか、そういった情報が入っていない方がいらっしゃるのではないかと。私自身がそうなので思うのですけれども、その辺は年代別に、現代のICT社会で情報の入りやすい人、入りに</p>

	<p>くい人によって、そこに課題もあるのではないかとということが、もしか書かれたら、私などの年代の層がいいなと共感するのではないかと思います。これは私の個人的な意見です。</p>
和須津委員	<p>今ほどの9ページの食べ物の無駄についてなのですからけれども、私も同じことが気になりました。年代別に食品ロスに関する価値観が少し違っているからこういう表が出てくるのではないかと。高齢者の方々は、昔から無駄にしないということが身につけている中で、もっと無駄にしない方法というのを考えての、まだ無駄にしていると思う価値観と、今、若い人は冷凍食品だったり、ミールキットみたいなものがあります。要は野菜くずが出ないで、切った状態でとか、カット野菜で買ってくるかということによって無駄にしないという方法をとっていたりして、使っている価値観が全く違うので、ここでこういった表が出てくるのは、それぞれの価値観の違いからロスに対する考え方が少し違っているから、高齢者の方はこれだけ落ちているという感じになるのかなと。ICTとか新しいものに対して対応できないということもあるのかもしれませんが、そういうところでずれがあるのではないかとというのが少し気になりました。</p>
高杉委員	<p>表についてはよくまとまっています、よろしいのではないかと思います。11ページの学校給食の地場産物使用割合を見ると、平成28年から下がっているという衝撃的な数字がありまして、やり方によってはもっと上げられるのではないかとこのところがありますし、新潟市内の農業者が持続的な農業を続けていくためにも、この辺については、別の場があれば増やしていけるような方策を執っていったほうが良いのではないかと思いますので、よろしくお願いします。</p>
会 長	<p>ほかにいかがでしょうか。</p> <p>先ほどの意見について、経年変化を示していただくときに、いつから載せるのがいいのかというのは、私自身は迷っていて、長期的なトレンドが分かったほうが、食育計画の第1次を策定したときからの変化が分かったほうが、取組によってどうなってきたのか分かるのかなと思いましたが、データがあるものとないものがあると思うので、事務局でもご検討ください。</p> <p>2点目が、少し大きい話になるのですが、6ページに第3次計画の施策展開の視点というものがあって、こういう方向で取り組みましたと。体験機会の充実と体験機会の対象やテーマの明確化と人材の育成・確保。これについてどうだったのかという総括が必要かと思って、それを17ページと対比して見たときに、体験機会の充実はできましたということがあるので、対応していると思うのですが、対応が分かりやすいように書いていただく。おそらく対象やテーマがうまく明確化できなかったから、若い世代につながっていないという評価になるのではないかと考えたのですが、その辺のつながりを分かるように書いていただいたほうが良いのではないかと思います。</p> <p>対象やテーマの明確化というところで、最初にご説明いただいたとき、課題が多い世代や若い世代にやるということで第3次はやったはずなのです。しかし、若い世代であまりよくなっていないので、そこはまだ未達成なのではないかということですね。</p> <p>3点目の人材育成・確保については17ページの評価のところでは触れていないので、少なくともそれは入れて、どのように整理するかは難しいのですが、何も触れな</p>

	<p>いというわけにもいかないかなと思いました。</p> <p>少し細かい点ですが、17ページの第4次計画にむけての〇の一つ目で、少し難しいのではないかと思った表現が、「大学生や働く世代、子育て世代等を中心とした無関心層」とあるのですけれども、この中の無関心層なのか、これ全体が無関心層というわけでもないと思うので、無関心層を除くかどちらか。若い世代の無関心層に特化するのか、無関心層というのは取ってしまって、その世代全部やるというふうになるか。私は後者でもいいかなと思っておりますけれども。</p> <p>今までで何かございますか。</p>
猪俣委員	<p>今、委員長がおっしゃったように、私も4次計画のところの無関心層というのがぼんと出てきて、前後のつながりがはっきりしないのかなと感じました。</p> <p>このところに取り組む必要はないのですが、14ページの、ゆっくり噛んで味わって食べる市民の割合というところで、後段に、口腔機能の改善や維持について、子どものころからの実践を促す取組みが今後必要ですと書かれていたのですが、新潟市、新潟県におきましては、実は、永久歯の齲蝕、むし歯予防のために、就学前の子どもたちからフッ素洗口並びにフッ素塗布を継続しております、永久歯の虫歯は全国的にもとても少ないことに原因があると思うのです。咀嚼をする、しっかり噛むような下地はできていると思いますので、記載する必要はないのですが、皆さんのほうにお知らせしたいなと思ってお話しさせていただきました。</p>
会 長	<p>ほかに委員の皆様から何かありますか。</p> <p>特にないようでしたら、次に第3章から第5章について進めたいと思います。事務局よりご説明をお願いいたします。</p>
事務局	<p>皆様、いろいろなご意見ありがとうございました。私自身もじっくり読んでみて、ここは少しおかしいなと思っていたところをまさにご指摘いただきました。特に17ページの今後の展開に向けた課題のところは1ページで簡単にまとめているので、ここをもう少し分かりやすいように構成をまとめ直したいと思います。</p> <p>グラフもまだ確定していない数値になるので、統一感がないグラフになっているので、ここももう少し見やすいようにし、経年の変化、年代別も分かりやすいように修正したいと思います。ありがとうございます。</p> <p>続いて、第3章です。第4次計画についての部分を説明させていただきます。第4次計画は、食育推進条例の基本理念に基づいて、食を取り巻く現状から見えてきた課題、第3次計画の評価を踏まえて、市民運動にふさわしい目標の達成に向けて、食育のさらなる推進を図ります。基本理念は先ほどもお話ししましたが、食育推進条例で掲げられている基本理念にのっとりします。市民一人一人が生涯にわたって健全な心と体を培い、豊かな人間性を育むことができるよう、施策を総合的かつ計画的に推進し、もっといきいき暮らせる活力ある住みよいまち新潟の実現に寄与することを目的とします。この文書と①から④が食育推進条例に掲げているところになります。第3次計画の評価や食を取り巻く現状から見えてきた課題を踏まえて、新潟市民の「食べることは生きること」を基本ととらえて、環境に配慮しながら、新潟の食へ自発的に関心と誇りを持つことを目指して、第4次計画の基本目標を設定します。このキーワードもまだ確定ではないと</p>

どうか、まだ悩んでいる部分があります。単純に「食べることは生きること」というキーワードにして分かりやすくするか、「楽しい」というようなワードを入れるかで少し揺れているところがありますので、もし、アイデアなどがありましたら頂きたいと思えます。

続いて、基本目標です。第3次計画では、20歳代から30歳代の若い世代において、食への関心度の低下や朝食の欠食など課題が残りました。また、新型コロナウイルス感染症の観点から、家庭内食が増加し、新しい生活様式に対応したデジタル化の推進など、社会情勢の変化も見られます。第4次計画では、こうした状況やこれまでの取り組み、成果と課題を踏まえ、豊かな自然環境のもとで米、その他多種多様な食料が生産され、都市と田園が共存しているという新潟市の特色ある基盤を生かし、新潟市民が「食べることは生きること」を基本としてとらえ、環境に配慮しながら新潟の食へ自発的に関心と誇りをもつことを目指しています。

基本目標は「食を楽しむ」、「食を大切にする」、「食で健康になる」の3つを掲げています。ここに、ピクトグラムありますが、SDGsに似ていますが、SDGsではなくて、農林水産省が今年度から策定しました食育ピクトグラムというものでして、そのどいった項目が関連してくるのかというものを載せております。まず、「食を楽しむ」ですが、若い世代を中心として、まずは食を楽しむことにきっかけとし、自発的に食へ関心を高めていけるよう、取り組みを推進していきます。また、新型コロナウイルス感染症の影響による家庭内食の増加に対応し、調理体験や収穫体験、食育マスター等による食育活動を通して、共食などの家庭食の重要性の再認識を図りながら、食育への関心を高めることを目指します。

(2)の「食を大切にする」です。私たちの食生活は自然の恩恵の上に成り立っていることを認識し、豊かな自然環境に恵まれた本市の特長を生かし、環境と調和のとれた持続可能な食料生産と消費に向けて、地産地消や食品ロス、新潟の食文化の継承に関する取り組みを推進します。前回の会議で宮川委員から、順番のところでご助言をいただきましたが、食を楽しむことと、食を大切にすることを通して、最終的に食で健康になることを目指していきたいということで、この順番に変えさせていただきました。

(3)「食で健康になる」ですが、食は生きるうえでの基本であり、「食べることは生きること」と認識し、生涯にわたって心身ともに健全で豊かな生活を送れるよう、切れ目のない食育を推進していきます。子どもや子育て世代を中心とした朝食摂取率の向上や、食に関する正しい情報を選択できるよう取り組むことで、健全な食生活の実践を目指します。

続いて、施策の視点・考慮すべき点です。3つの項目を施策の視点や考慮すべき点として取り組みを推進します。まず、若い世代に対する取り組み強化です。進学や就職等で生活環境が変化して、食生活の自立が求められることから、食の課題が多い学生や働く世代等の若い世代へ、大学や企業等と連携を図りながら重点的に取り組み、食への関心を高めます。子育て世代の食環境は子どもの基本的な生活習慣の基礎づくりへの影響力が大きいことから、家族で健全な食生活を実践することができるよう、食や健康への関心を高める取り組みを推進します。食体験を通じて「楽しい」から始まる普及啓発を行

い、無関心層へ働きかけます。

2つ目の「新たな日常」への対応です。「新たな日常」、「新たな生活様式」による暮らしの変化を踏まえ、デジタル化に対応し、ICT等を活用した新しい視点での効果的な情報発信に取り組みます。在宅時間の増加傾向を踏まえて、家庭における食育の推進を図ります。

3つ目の食育の推進によるSDGsへの貢献です。食育の推進は、目標2の「飢餓をゼロに」目標3の「すべての人に健康と福祉を」、目標4の「質の高い教育をみんなに」、目標12の「つくる責任、つかう責任」等に関する項目において貢献することが可能であると考えています。食育を通して健全な食生活の実現や豊かな食文化の継承、食品ロスの削減など、SDGsへの貢献を視野に入れて食育の推進を図ります。

施策の体系図ですが、大きな目標としては新潟市食育推進条例における目的がありますが、それに向かって、基本目標の食を楽しむ、食を大切にする、食で健康になるという目標を立てて推進していきます。施策の視点として、若い世代に対する取り組み強化、「新たな日常」への対応、SDGsへの貢献という視点を考慮しながら施策を進めていきます。

6つの基本的施策と主な取り組みですが、こちらは第1次計画からの6項目に沿って、今回も継続で書かせていただいております。1つ目は市民運動としての食育の推進、2番目は家庭における食育の推進、3番が学校、保育所等における食育の推進、4番が地域および職場における食育の推進、5番が環境に配慮した食育の推進、6番が食の安全・安心に関する食育の推進という6つの基本的な施策と、それぞれに付随する具体的な取り組みといったものを次のページからお示ししております。これもこの6項目でいいのか。特に1番の市民運動としての食育の推進というのが、4番の地域および職場における食育の推進と少し似ている部分もあったりして、すみ分けが難しいと考えていたのですが、こういったところもご意見をいただけるとありがたいです。

続いて、5の数値目標です。施策の評価や達成度を把握するために数値目標を設定し、その目標値の達成に向けて施策を進めることとしています。「食を楽しむ」については、食べることを「楽しい」と思う市民の割合。こちらは新規の指標になります。2番目、1日に1回以上、だれかと一緒に食事をしている市民の割合。こちら、今まで共食が大切だと思うかということと、共食を何回したかという共食に関する項目から、質問の聞き方、指標のとり方を変えております。3番の農林漁業体験を経験した市民の割合は継続です。4番の、アグリ・スタディ・プログラムを体験し、本市の農業への誇りが醸成された小・中学生の割合については、農業学習体験学習を実施した学校の実施率から、実際の児童の意識がどう変わったかという成果指標へ指標を変えています。

(2)「食を大切にする」ですが、身近な場所でとれた食材を選ぶ市民の割合は継続しております。食品ロスを減らすために取り組んでいる市民の割合は、先ほどの食べ物を無駄にしないように行動している市民ということと同じなのですが、少し聞き方を変えて、具体的にどういった行動をしているかということが見えるように、調査の中身を変えております。7番の、学校給食における地場産物を使用する割合は継続ですが、今まで食品数ベースというもので、何品目使ったかという統計の仕方から、国にあわせて、

食材費のうちいくらが新潟市産だったかという金額ベースの算出に変わる予定です。8番は新規の指標ですが、何割市内産のものを使ったかという数値だけではなくて、それを実際に子どもにどう伝えたかという、栄養教諭を核にした食に関する指導の取り組みの回数というものも新しく見ていきたいと思っております。9番は、食文化を受け継ぐことを大切だと思う市民の割合。食文化に関してこれまでの質問の継続ですが、聞き方を端的に分かりやすく変えてあります。

(3)「食で健康になる」という目標に対しては、新規の指標ですが、「主食」、「主菜」、「副菜」のことや意味を知っている市民の割合。子育て世代というところを新しく入れております。11番、12番は継続ですが、今まで20歳代、30歳代というところを指標の対象としておりましたが、20歳代、30歳代という年齢ではなく、子育て世代というところで数字を見ていけたらと思っております。

続いて、第4章は具体的な食育の推進、取り組みについてまとめております。先ほどお話しした6つの基本的な施策について、それぞれの施策ごとに推進する主な取り組みを掲げております。まず、市民運動としての食育の取り組みです。関係者と連携・協働し、明るく楽しく、自ら食育に関する活動を実践できるように、具体的な実践や活動を通して理解の増進を図ることとしています。まずは継続的な食育推進運動になりますが、「食育月間」や「食育の日」にあわせた普及啓発、ホームページやSNS等を活用した情報発信等。その下に、「食育の日」の取り組みというところで写真が載っておりますが、こちらはまだ途中になっておりますけれども、いろいろな行政が行っている取り組みについて抜粋して写真やイラストで具体的な中身もお示ししていきたいと思っておりますので、これから加筆していく予定です、

2番は、各種団体等との連携・協力体制の確立。食育推進会議を中核としまして、庁内関係課との連携を図るなど、連携と協力体制を確立していきたいと思っております。

3番は、地域の力を生かした食育の推進です。こちらは食育マスターや食生活改善推進委員、運動普及推進委員というボランティア等と連携し、地域での食育を推進していきたいと思っております。その担い手の養成や研修会、勉強会を実施していきます。

食育・花育センターにおける食育の推進は継続して、日本型食生活の実践につながる料理教室や団体プログラムで幼児、保育園児や小学生を対象とした体験プログラムの実施、市民に向けた食育ミニ体験などを引き続き継続して行っていきたいと思っております。

5番目はあらゆる広報媒体を活用した食育の普及啓発、情報の発信になります。新聞、テレビ、ラジオ、インターネット、広報紙とさまざまな情報媒体がありますが、それらの手段を活用し情報の発信及び食育の普及啓発を行っていきます。レシピ掲載ですとか、まいかちゃんを活用した普及啓発も行っていきます。

2番目の施策が、家庭における食育の推進になります。基本的な生活習慣を学ぶ場である家庭において、生涯にわたって切れ目なく心身の健康の増進と豊かな人間性を育む基盤づくりを行うとともに、次世代へ伝えつないでいけるよう取り組みます。1つ目は、望ましい食習慣や知識の習得です。朝食欠食率が子どもでも悪化しておりますし、朝食摂取、早寝早起きなどに関する取り組みも推進していきます。親子料理教室、給食の試食会や給食だよりの発行を通じた保護者への普及啓発。また、就学時健診や入学前の学

校説明会等の機会を活用した、家庭教育に関する講演会等の開催。児童生徒の生活習慣病健診、各種健康センター、区役所、地域保健福祉センター等における健康教育、健康相談。運動器や口腔器の機能向上や栄養改善等についての高齢者のフレイル予防に関する取り組み等です。

2番目は、妊産婦や乳幼児に関する食育の推進です。安産教室において妊産婦の望ましい食生活について相談と指導を行います。離乳食講習会や乳幼児検診、育児相談等の実施を通して、乳幼児期の食生活について相談と指導を行います。

3番目は、男女共同参画を踏まえた食育の推進ですが、「男の料理教室」や、子育て期の男性向けの講座を開催し、男性からの食育への理解の増進を図ります。また、食育・花育センター等の料理教室において、男性向けの料理教室や、親子や家族での参加が可能な教室の開催等も実施していきます。

④は新しく追加した項目なのですが、在宅時間を活用した食育の推進ということで、ワーク・ライフ・バランスの推進や暮らし方の変化、新型コロナウイルス感染症の影響等による在宅時間の増加を踏まえて、家族との共食や自宅料理への意識が高まるような働きかけを行っていくということで記載しております。

続いて3番目の施策が、学校、保育所等における食育の推進です。学校や保育所は基本的な生活習慣を身につける場としても重要ですし、栄養教諭、保育士等を核として食育を推進していきます。1番目が保育所、幼稚園における食育の推進です。保育所や幼稚園の教職員対象の研修会や、クッキング保育、野菜の栽培などの体験活動、保護者対象の試食会や親子クッキング、野菜作りや収穫、調理体験。また、各施設では食育計画の作成を行うことによって、子どもたちの食を営む力の基礎が培われるような取り組みを進めていきます。

2番目は、小・中学校における食育の推進です。学校においては栄養教諭の配置を進めております。教職員を対象にした研修会や教職員向けの意識啓発は必要ですし、栄養教諭等の研修会、地域の団体や人と連携した取り組みですとか、生活習慣病健診事後指導における保健師や栄養士との連携というものです。生活習慣病予防のためのパンフレットの配布、アグリパークやいくとぴあ食花の有効活用を促進すること。また、学校教育田の設置等、小学校、中学校において食育を推進していきたいと思っております。

3番目は、給食を通じた食育活動の推進です。給食を生きた教材として積極的に活用していきます。地域の特色を生かした地場産学校給食や生産者との交流給食会を通して感謝の気持ちを深めるように努めます。給食だよりの発行や給食試食会、地域の特長を生かした学校給食の実施、学校給食における地産地消の推進です。調理員等の給食にかかわる人々とのコミュニケーションを通して感謝の気持ちを深めたり、食事の作法やよく噛んで食べるなどの望ましい食習慣を身につけるよう、給食時間における指導の充実、完全米飯給食等、学校給食を通じて推進していきたいと思っております。

高校・大学等における食育の推進ですが、中学校卒業後の子どもに対する食育を推進するための仕組みづくりについての検討ですとか、大学の学生食堂等と連携した取り組み、学生自身へのヒアリングだったり意見交換、共同でレシピを考案したり、そういった取り組みも進めたり、デジタル化の活用を生かして食に関する理解や関心が高められ

れるように、効果的な情報提供を行っていきたいと思います。

(4) 地域および職場における食育の推進です。すべての世代における健全な食生活の実践には、家庭や学校のみならず、食育を地域に密着した取り組みとして推進していくことが重要です。アプローチが届きにくい働く世代では、健康経営が広がっていることを契機とし、職場において食育に取り組むことが必要となっております。

1 番目は、日本型食生活の推進です。「食育ガイド」、「食生活指針」、「食事バランスガイド」等に基づいた、日本型食生活の推進に向けた取り組みの実施。食育の日の取り組みや各講習会や料理教室、ホームページやSNS等における日本型食生活に関する普及啓発。事業所給食施設の利用者への健康づくりの支援等を行います。

2 番目は、健康寿命の延伸につながる食育の推進です。給食施設に対する定期的な巡回指導ですとか、特定保健指導や健康相談の実施、噛むことの重要性などの内容を盛り込んだ歯科保健指導、健康づくりをテーマにした食育・花育センターでの料理教室の開催。各区の地域の健康課題にあわせた健康寿命延伸事業というものを取り組んでおりますので、そういったものを引き続き実施。また、健康づくりに配慮したメニューを提供する飲食店の登録と普及啓発の取り組みを進めます。

3 番目は、職場における食育の推進です。施設管理者や栄養管理責任者に対して、給食利用者の栄養管理や食育の取組みに関して促進を図ります。社員食堂等における健康に配慮したメニューの提供や食育関連情報の提示を促進します。

4 番目は、専門的知識を有する人材の活用の推進です。食生活改善推進委員等のボランティアの養成や団体との連携、栄養士や調理師等を養成する学校との連携、食育マスターを活用した地域住民による自発的な取り組みの促進を行います。

5 番目が新しくつけ加えた項目になりますが、地域における共食の推進というところで、こども食堂に関して、地域の茶の間などもそうですけれども、そういったところを介しての食育の推進も新しく図っていきたいと考えております。こども食堂について明記するときに、今、共食という視点から入れておりますが、貧困等も記載していこうかなというところで悩んでいるところではあります。ご意見がありましたらいただきたいと思います。

(5) 環境に配慮した食育の推進です。SDGsを踏まえて、地産地消ですとか、食文化の継承、食品ロスの削減等の普及啓発により、環境に配慮した持続可能な食育を推進します。

1 番目は、農林漁業体験を通じた食育の推進です。農林漁業体験の実施や、農業サポーター、農業ボランティアの登録の取り組みですとか、市民農園や収穫農園、都市型グリーンツーリズムの推進。新潟発わくわく教育ファームの推進というところで、農林漁業体験を通じた食育の推進を図っていきたいと思います。

2 番目の地産地消の促進ですが、地産地消の推進の店の認定や地産地消マップの作成、新潟市食と花の銘産品の登録など、いろいろな情報のデータベース化。学校給食における市内産を優先的に使うというところを進めていきたいと思います。

3 番目の食文化の継承につながる食育の推進ですが、学校給食や食生活改善推進委員等の行う地域での講習会等において、伝統的な食文化を取り入れたメニューの提供の促

進。レシピ集など印刷物の作成と配布。いろいろな情報手段を活用した情報発信や料理教室の開催。

4番目は食品ロスに関連する食べ物を無駄にしない取り組みですが、無駄なく消費できるように、市民が実践できるように、リーフレット、ホームページ、動画などから情報発信を行います。また、食品ロスの普及啓発を目的としたレシピコンテスト、フードバンク活動やフードドライブの呼びかけ等を行います。

5番目も新しく追加した項目になりますが、持続可能な食につながる環境に配慮した消費の推進になります。給食センター等から出る食べ残し、及び調理くずの堆肥化処理の実施、豚の餌としての活用、環境に優しい農業を実践する農業者の支援。段ボールコンポストによる生ごみの減量促進といった取り組みをしていきたいと思ひます。

最後に6番目ですが、食の安全・安心に関する食育の推進です。市民の食の安全・安心、食生活や健康に関する正しい情報を理解し、自ら食品を選択する力を培えるよう食育を推進していきます。食品の安全制に関する知識と理解の増進については、食中毒情報や食肉の安全性、食品衛生の知識等の基本的な情報の提供。健康食品等の虚偽、誇大広告についての講習会等の開催。食の安全基本方針に基づいた食の安全・安心を確保するための事業の実施。中央卸売市場や農産物等の集荷場の見学、食品製造工場での体験学習会等を通じた理解の増進を図りたいと思ひます。

2番目が、食品表示への理解の促進ですが、中央卸売市場や販売店での製造業者等への表示講習会の開催、または学校給食をはじめ社員食堂、飲食店における栄養成分表示の原産地表示の促進です。

3番目は、基礎的な調査・研究等の実施および情報提供ですが、市民アンケートを実施し、実態把握、結果の公表及び普及啓発を広く行っていきたいと思ひます。

1番から6番までの基本的施策と、それに付随する具体的な取組みをまとめたものが36ページまでになります。

次が、ライフステージに応じた食育の取組みですが、ページが切れてしまっただけで申し訳ないのですが、修正して見開きで分かるように直したいと思ひます。各年度に応じた食育に関するポイントと、食を楽しむ、大切にす、食で健康になるという目標で見たときに、どういった具体的な取組みを目指していきたいかをまとめたものが37ページ、38ページになります。

第5章の計画の着実な推進に向けては、これまでの内容を引き続き継続していきますが、食育推進会議や市の推進体制を核として、情報共有を図って関係者で一体的に計画に取り組んでいきたいと思ひます。家庭や教育関係者と保健医療関係者、生産者、食品関連事業者、行政、市において、こういった役割を担っていただけるように、社会全体で取組みを推進していきたいということが書かれております。あとは、進行管理と資料編のところで、食育推進条例と、皆さんの委員名簿もつけてさせていただいております。あとは国の食育基本法をつけさせていただく形で、第4次計画を構成させていただきましたが、こちらは先ほどと同じように、ちょっとした気になるところでもいいですし、構成のところでもいいですし、何か気になる点等がありましたら、ご意見いただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

会 長	<p>ありがとうございました。</p> <p>多くの資料を提出していただきまして、大変だったと思いますが、委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。</p> <p>私から、単純な質問なのですが、19 ページに農林水産省のピクトグラムが入っていて、23 ページからはSDGs。SDGsは見慣れているのと、20 ページに全部記載されているので分かるのですが、19 ページは唐突な感じがするのですけれども。</p>
事務局	<p>農林水産省で新しく作ったものなので、活用したいなと思って入れてみたのですが、ぱっと見ると、SDGsのロゴに見えてしまって、逆に分かりづらいなということで、私も迷っているところではあります。一応、コラムとして食育ピクトグラムを載せようと思いますが、ここに入れるとSDGsと間違ってしまうかなというふうに、思いました。</p>
会 長	<p>それでは、コラムで説明していただければいいのかなと思います。</p> <p>ほかに気になる点などはありますか。</p>
松井委員	<p>23 ページの(1) 市民運動としての食育の推進とありますけれども、運動という単語は 20 世紀の単語ではないかと。活動とか、そういった文言のほうが多分、耳心地がいいのではないかと思います。</p> <p>27 ページに男女共同参画とありますけれども、逆に、男女という言葉を使うことが、今はどちらかというとNGに近い状態で、ジェンダーレスとかのほうがよろしいのではないかと思います。</p> <p>春川さんから最初に、(1) 市民運動としての食育の推進と 4 番の地域および職場における食育の推進が似ているようで似ていないと。細かい中身を見たときに、これは分けていますけれども、地域は確かに市民運動のほうに近い言葉だと思うのだけれども、および職場におけるという、この部分は分けたほうが若干いいのではないかと思います。</p>
会 長	<p>ありがとうございます。</p> <p>そうすると、1 番のほうに、地域の取り組み、地域の主体がやるようなものや、私も、日本型食生活の推進とかその次の健康寿命の延伸、これは全体的な話なので、むしろ 1 番のほうに全体的なものを入れて、4 番のほうに地域の各種主体、団体がやるものと職場がやるものを分けて入れるといいのではないかと思います。</p> <p>皆様からも引き続きご意見をいただければと思います。ありがとうございます。</p> <p>馬場委員、何かございますでしょうか。</p>
馬場委員	<p>18 ページのキーワードのところなのですが、正直、私はこれが分からないのです。どちらかといったら、ストレートに「食べることは生きること」を出してもらったほうが伝わるのではないかと思います。急にこれが出てくるのですが、はじめようといっすえにはじめている方もいるし、なかなかこれは私にはしっくりこないかなと思いました。</p> <p>25 ページの各種広報媒体普及資材を活用した取組みに、QRコードを載せていらっしゃるのですが、私もインスタやツイッターを見せていただいているのですけれど</p>

	<p>も、そのスクリーンショットを載せたほうがいいのではないかと。QRコードをここに載せても、ここからいくかといったら、ここからいけるような人は自分で検索をかけられると思うので、あまりQRコードはいらないかなと私個人的には思いました。</p>
会 長	<p>ありがとうございます。最初のキーワードはとても重要なご意見だと思うのですが、これも含めて、ほかの委員の皆様からもご意見をいただければと思います。</p> <p>葛見委員、何かございますか。</p>
葛見委員	<p>キーワードのところで、「はじめよう！楽しくたべて、えがおの輪」というのは、私も同様に刺さらなかったということと、あとから「食べることは生きること」ということが繰り返し出てきているというところから、キーワードは「食べることは生きること」にされたほうがよろしいのではないかと私も思いました。</p> <p>その他の部分に関しては、皆さんが言われている部分が多いので、私は以上となります。</p>
会 長	<p>ありがとうございます。</p> <p>松井委員にもお伺いしたいのですけれども、スーパーの観点で、消費者と日常的に接しているということで、キーワードについてはいかがですか。</p>
松井委員	<p>当初、「食べることは生きること」というのはキーワードでしたね。この言葉はだめだと思ったのです。堅すぎるというか、「食べることは生きること」というのは、ほかの部分でいっぱい出てくるから、逆にあえてここでキーワードがきてどんと取り上げるのではなくて、今回、基本目標の3つに、食を楽しむとか食を大切にするとか食で健康になるということで、食は楽しいのですよというようなイメージのキーワードにしてほしいといって、私個人的には事務局に松井案を送ったのですけれども、それは使われていませんけれども。要は、食べることを楽しもうという意味合いのキーワードを私はここに入れるべきだと思っているのです。なぜかといったら、ターゲットが、先ほど言い忘れましたけれども、19ページの基本目標（1）の食を楽しむというところに、若い世代や無関心とあるのですけれども、無関心な人にあえて何かつけても無関心はなおらないと思って、これはいらないと思うのです。逆に、若い人というのは、10代から30代の方でいいと思うのです。そういう方に、食べることは楽しいんだよ、おいしいんだよ、新潟の食はいいんだよということが刺さるキーワードが私はいいいのかなと思いました。</p>
会 長	<p>ちなみに、松井委員のご提案というのは、どういうものだったのでしょうか。</p>
松井委員	<p>新潟の食をみんなで知ってと、そういうことです。</p>
会 長	<p>それで楽しむと。</p>
松井委員	<p>そうです。そういった内容だったと思います。</p>
会 長	<p>ほかの委員の方、あるいは事務局から、今の皆さんのご意見を聞いてどうでしょうか。</p>
事務局	<p>キーワードのところで私自身もすごく悩んでいるところなのですけれども、第4次計画の本当のテーマが楽しむということなのかなと思っているので、それが分かるように、葛見委員や馬場委員からも刺さらないと言われてしまったのですが、もう少し刺さるような、でも楽しいをイメージできるようなキーワードにしたいと思いつつ悩んでおります。</p>

猪俣委員	何回も何回も、「食べることは生きること」というのが出てきています。やはりこれはとても大切な部分かと思うので、多すぎるかもしれませんが、上段に「食べることは生きること」で、「始めよう！楽しくたべて、えがおの輪」という、少ししつこいかもかもしれませんが、もう一度、食べることを考え直して、みんなで楽しく食べようねというようなメッセージを送りたいと思うので、どちらも入れたいと。
会 長	生きることと楽しいことというのを両方入れたいと。私もそんな感じがするのですけれども。
宮川委員	<p>このように、たくさんのことを伝えたい、たくさん情報を皆さんに理解していただきたいときに、あまりキーワードとか、それが中心になるような言葉というのは、多すぎると全然キーになってこないのではないかと思うのです。散らばせすぎると。今さらこんなことを言うのも何なのですからけれども、キーワード自身がいるのかどうなのかなと思うのです。基本目標として、食を楽しむ、大切する、健康になるという3点セットでいくのだとしたら、あまり無理してキーワードということで、ここであえて押すことはないのではないかと私は思います。</p> <p>先ほど、委員長もおっしゃったのですけれども、農林水産省の図ですが、私もすごく違和感をおぼえました。今、SDGsがあらゆるところでいわれています。もしここに入れるのだとしたら、そちらのほうを入れたほうが次につながっていくのではないかと思います。農林水産省との関連でこれを取り上げないとまずいのでしょうか。その辺が疑問でした。</p>
会 長	<p>ありがとうございます。</p> <p>まず、キーワードの必要性なのですが、私も今、ご意見をうかがって、混乱するので、なくてもいいのかなと思ったりはしました。</p> <p>ピクトグラムの農林水産省の背景というのはご説明いただければと思います。</p>
事務局	特に載せなくてははいけないというものはありません。
会 長	<p>キーワードについては、一言で表すのは難しいので、なしということでもよろしいですか。それでは、そういうことにします。</p> <p>図も混乱するので、入れないと。</p> <p>ほかにはいかがでしょうか。</p> <p>第3次ときは、目標として、拠点施設、食育・花育センターでのプログラムの数を入れていたのですけれども、今回はそれが無いのは何か理由があるのですか。目標を達成したからですか。</p>
事務局	目標を達成したということと、数は増えているのですけれども、こちらの事情とも重なってくるのですが、実施している内容というのが、普通の料理教室だったりすると、60代女性とかの料理教室のリピーターの方が多く、回数としてはたくさんやっているのですけれども、第4次計画として進めていきたいと考えたときに、リピーターの方に向けて定期的な料理教室の回数としては、指標に入れたい方向で考えたいと思っております。
会 長	まさにそこが重要なところで、若い世代をターゲットとして置くとずっといつているのだけれども、そうやってきているとすれば、むしろそちらを変えないといけなわけ

	<p>で、今、60代が多いから指標から抜くというよりは、逆に若い世代を、ターゲット層対象の企画の数とか、参加者数とか、目標にあった指標にしていくことで、それを推進していくという視点が必要なのではないかと思います。新潟市がお金を出して運営しているわけですから、最も新潟市にとってパワフルなツールなわけですよ。ですので、ぜひその視点でお願いしたいと思いますが、村井委員、ずっとやっていて、いかがですか。この委員会でも、委託になる前からやってきていて、けっこううまくやってきていたという印象があったのですけれども、拠点施設での食育をどのように強化していったらいいか。何かご意見があったらお願いします。</p>
村井委員	<p>拠点の食育の評価ということでしょうか。数値でというよりは、何をやってきたかということがよく分からないというのが印象なのです。確かに、1個1個でいけば、何パーセントという数値で出すほうが分かりやすいのでしょうかけれども、回数が大事なのかということと、食育というのは、この中を見ていて思うのですけれども、子どもが生まれて、育て、大人になってという時系列の食育の移り変わりがすごく大事だと思っていて、継続性とか連続性みたいなものを指標の中に何とか入れられないかなということもいつも思っています。施設の評価も、例えば第1次のときにやっていた世代が、2次、3次、4次と成長していくに従って、こんなふうに変わってきたというような時系列の評価みたいなものがあると、新潟市の施策がどのような形で進み、これからどのような方向へ行けばいいのかということが分かりやすくなるかなと思いました。</p>
会 長	<p>ちょうど昨日、栄養サミットで農林水産省の食育のセッションをやっていて、小浜市は食育をすごくやっていますよね。小浜市では成人で食育の、まさに時系列での評価をするために、子どものころに集中的にやっているのですけれども、義務食育といって、義務教育の15年間で徹底的にやるという方針でやっていて、それが20歳になったときにどういう効果があったのかを成人式で確認しているらしいのです。調査票を配って。その結果が少し出てきて、まさに新潟市が今回目標とするといっている、地域に対する愛着、食育を受けたことがよかったという人がかなり高く、さらに、地域への愛着を持つようになったみたいな項目も高くなっていて、あとは自己肯定感もそれに伴って高くなっていったということで、小浜市が目指す食育のあり方というか最終ゴールが達成できたと思うといった発言があったのです。そういうこともよくやっているなと思ったのですが、一つの考え方として、例としてご紹介させていただきました。</p>
村井委員	<p>先ほど、32ページで地域における共食の推進という、こども食堂のお話があったのですけれども、確かにこども食堂については貧困というイメージがまわりついている部分があって、表現がなかなか難しいだろうというのはあるのですが、ここ最近、新型コロナウイルス感染症でこども食堂の活動がなかなかできないということはあるにせよ、こども食堂の形態自体が、貧困対策から地域の食体験とかあるいは伝統食の文化の継承ですとか、いわゆる食育の分野にすごく大きく貢献していく取り組みだということが認識されるようになってきていますので、新潟でも、寺子屋などでは地域のおばさんたちが、新潟の自分たちが普段食べていた食事を提供することで、そこに来られている若いお母さん方とか、あるいは東京から転勤されてきたご家族の方が、新潟にはこんなにおいしいものがあるのですねということで、作り方を学んだり、そういった体験をする場にも</p>

	なっていますので、こども食堂のコラムも含めて、もう少しボリュームを持たせて、こども食堂はこんな展開がありますよということを紹介していただくような形にすると、認識も少し変わっていくのではないかと思います。
会 長	ありがとうございます。私も、こども食堂についてはあまり貧困というのは強調しなくてもいいのではないかと思います。
和須津委員	少し戻って、5番の数値目標の表のところ、3番の「食で健康になる」のところの、年代のところ、子育て世代と18歳以上となっているのですけれども、18歳以上と子育て世代がかぶっていると思うので、ここのところの違いがもう少し把握できるようにしたらいいのではないかとということ、今ほどのこども食堂の件についても、今、こども食堂と茶の間というのをあまり分けなくて、地域で子どもを育てるといような感覚で、茶の間に子どもさんたちも一緒にいれるということで、お年寄りも子どもも一緒というのがより健康的で、地域に貢献していくと。お年寄りからまたいろいろな知識を子どもがいただくことができるということで、最近は茶の間も子どもと全部一緒という傾向が出てきているので、そういったことをもっと推進すべきではないかというのが見えてきていると思います。
会 長	ありがとうございます。22ページの指標の年代分けなのですが、こちらは特出しするというイメージでしょうか。子育て世代というのは何歳から何歳なのか。
事務局	18歳以上は、18歳から70代、80代までの全世代の平均値をとる数値になります。子育て世代は、小学校の保護者を対象にアンケートをとりたと思っていますので、実際に今、子どもを育てている親ですが、その方たちがどのようなものを食べているのか、朝ご飯は食べているのかというのが、一緒に食べている子どもにとってはすごく影響力が強いですし、子どもは親の食を見ていると、そういうものなのだとなと定着化していきますので、特に子育て世代は重要だと思っていますので、そういった人たちが望ましい食生活をできるように、第4次計画で取り組んでいきたいということで、全世代を見る18歳以上と、子育て世代という2本立てで考えております。
会 長	ありがとうございます。そうすると、対象者が違うということですね。年代では分けられなくて、保護者が何歳か分からないからということですね。 ほかにはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。 限られた時間の中でたくさんのご意見をいただきました。もしかすると、言い切れない場合、直接、メールで事務局にご意見をいただければと思いますが、よろしいでしょうか。
事務局	細かい内容もいろいろとありますので、今日、ここでは思いつかなかったけれども、後から気になる点、ご不明点がありましたら、いつでも事務局のほうにメールや電話、ファックスなり頂ければと思いますので、よろしくお願いします。
会 長	とはいえ、期限がありますね。
事務局	1月下旬から市民意見参集ということで、パブリックコメントをしますので、1月中旬くらいまでに頂ければ、検討させていただきたいと思います。
会 長	1月中旬くらいまでに、ご意見がありましたらお願いいたします。 それでは、次に移ります。議事（3）「食育に関する市民アンケート調査について」、

	事務局より説明をお願いします。
事務局	<p>皆様に事前にアンケート調査票をお送りさせていただき、お忙しい中、いろいろなご意見、ご感想などを頂きました。本当にありがとうございました。客観的なご意見を頂いて、確かにそうだなと、市民目線だと分かりにくいなというところでいろいろな気づきもありましたので、大変参考になりました。アンケート調査について、修正したものが本日お配りした資料3になりますが、本日、最終確認をいただいて、本日中に内容を確定させて、年末年始の実施に向けて業者にデータをお渡しすることとなっております。前回お送りしたのものからの変更点を中心に説明させていただきます。</p> <p>まず、2 ページ目の問2のところです。ここは新たに追加した質問になります。食事の楽しさにつながる食事づくりについて、新しく質問を追加しました。直接、指標にかかわるところではないですが、性別、年代別での比較や食事づくりにかかわっている人、かかわっていない人の問1の「食べることは「楽しい」と感じるか」どうかの関連について傾向を見たいと思って追加しております。</p> <p>問3の「食に関心がありますか」ということで、「関心がある」と答えた人に対しての問3-1、関心がある理由のところですが、3番の生活習慣病のところ、高血圧症というものを追加しています。4番の「食にまつわる地域の文化や伝統を守ることが大切だから」という文言でしたが、それを、「文化や伝統に興味があるから」と、分かりやすい文言に変えています。5番目も、「生産者と消費者間での交流や信頼が大切だと思うから」も分かりにくいということで、「食品の生産地や生産者等が気になるから」ということで変更しております。7番目の、「自然の恩恵や食に対する感謝の念」というところを「気持ち」と変えました。8番目に、「食べること、料理をすることが好きだから」という理由も追加しております。</p> <p>問4の朝食の質問です。当初、「朝食を食べるとは、エネルギー源となる食べ物を食べた場合のことをいい、お茶類や水、錠剤、カプセルしか摂らない場合は該当しません」という文言を質問の下に記載しておりましたが、実際、朝、錠剤やカプセルなどのサプリメントやプロテインのみ摂取している人がどのくらいいるのかを見たいということと、サプリメントのみ摂っている、プロテインのみ摂っている人が、「朝食を食べている」と判断している人がどのくらいいるのかを把握したいと思ひまして、あえて、問4-1の11番にサプリメント、12にプロテインを追加してみました。質問自体は、「あなたは日ごろ朝食を食べていますか」という質問なので、第3次計画のときの質問の仕方と同様ですので、「週に1~2回食べる」、「ほとんど食べない」と回答した人の数値は、第3次計画の評価の数値として用います。もしかしたら、前回のアンケート調査の際も、プロテインのみ摂っているとか、サプリメントのみ摂っている人も、「朝食を食べている」と回答した方が含まれていたかもしれないと考えられるのですが、今回、朝食を食べたと判断している人が実際に何を食べていたのかという中身も見たいと思ひます。ただ、第4次計画の指標として、朝食を食べているという指標として考えたときに、サプリメントのみ摂っている、プロテインのみ摂っているという場合は、朝食を食べたと判断するのではなくて、あくまでもエネルギー源となる食べ物を食べている人の向上を目指したいと考えていますので、そこはクロス集計等によって、サプリメント</p>

やプロテインのみ摂取の人たちは朝食を食べていない数に含めて数値を出して、第4次計画の指標に活用できたということ修正してあります。

問4-2に、当初は、3つまで○としていたのですが、3つまでにする理由も特にありませんので、当てはまるものすべてに○ということを変えさせていただいています。

問5は、当初は「生活習慣病の予防や改善のために、あなたは普段から適正体重の維持や、減塩、野菜の摂取等に気をつけた食生活を実践していますか」という聞き方だったのですが、1つの質問項目で、適正体重の維持、減塩、野菜の摂取という3つの事柄を聞いていて、少し分かりづらいということで、1番の適正体重の維持、2番の減塩、3の野菜の摂取を実践していますかという、やっていることを選択の聞き方に変えております。適正体重に関しましては、厳密にBMIいくつを目指しましょうというところまではお示しせず、本人の意識として、太りすぎないように、痩せすぎないようにということに気をつけているかということを知りたいので、あえて適正体重の維持の詳細までは記載しておりません。

続いて、問7に（肉や野菜などさまざまな具材が入っている丼ものや、ワンプレート料理、ミートソースパスタとサラダなどの組み合わせなども該当します）という文章が入っておりまして、この文章もいらないのではないかとのご意見をいただいたのですが、理想的な一汁三菜の和食だけではなくて、丼ものやパスタ、洋食等といったものもそろっていれば該当するというイメージを持っていただきたいので、あえてこの文言は残したいと思います。

問8で、家族が農林漁業に従事している場合は含むかというご質問がありましたので、2行目に、「家族が農林漁業に従事している場合も含めます」ということで追加しております。

問9で、「よく噛んで」の具体的な回数を示したほうがいいのかというご意見をいただきましたが、前回の調査と同様、回数を何回と具体的に提示せずに、本人の意識的に、「食べるのが速いから、あまりよく噛んでいないかも」とか、食べながら何回というところも分かりづらくなってしまおうかと思うので、あえて回数は書かずにお示ししています。

問14で、地産地消を考えたときに、地産地消の範囲といえますか、身近な場所という単語にするとか、もう少し具体的なもの単語、地元だとか、別のワードにしたほうがいいのかといったご意見も頂きました。地産地消の定義というか、県内、市内というところも少し難しい問題ではありますので、表現自体は前回同様、身近な場所という文言にさせていただいております。

修正したところは今申し上げたところになりますが、一応、調査票としては現時点でこのような内容で考えておりまして、今日、皆様から最終確認と気になるところのご意見を頂いて、今日中に修正して、業者にデータをお渡ししたいと思っておりますので、何かありましたら、教えていただきたいと思っております。

そのご意見を頂く前に、資料4をご覧いただきたいと思っております。こちらは直接市民アンケートとは関連しておりませんが、食育に関する子育て世代へのヒアリング調査を夏に実施したものの結果概要をまとめたものになりますので、皆様に参考にお渡しさせてい

たきます。

時間も限られておりますので、結果のまとめのところだけお話しさせていただきます。6ページをご覧ください。子育て世代のヒアリング調査の結果を見て、参考として骨子の内容にも反映させたところではあるのですが、35人の子育て中の方にヒアリング調査を行いまして、そこから見えてきたところが6ページの右下の4のまとめです。朝食の欠食や、主食・主菜・副菜を組み合わせた食事の頻度、1日3回の食事の摂取等において、これまでは20～30歳代の若い世代は課題が多いというふうに、年齢の区切りで判断していたのですが、ヒアリング調査を行ったところ、父親で朝食を食べている人は7割未満で、3割の人は朝ご飯を食べていないという現状でした。逆に、お母さんのほうは9割以上が週に3～4回以上、またはほとんど毎日食べているということだったので、20代、30代と数値を見ていましたが、そこからさらに性別で見ると、特に男性のほうで朝食を食べていない方が多くいるということが分かりましたし、主食・主菜・副菜を組み合わせた食事の頻度も、父親が62.9パーセントくらいでしたが、母親は77.2パーセントということで、同じ家族なのですが、食べているものが違うということです。1日3回の食事摂取も、父親のほうは58パーセントの方しか1日3回食事を摂っていない。母親は84パーセントということで、お父さんは朝ご飯を食べない人が多いですとか、お仕事中的お昼ご飯の内容とか、同じ家族でも、お父さんとお母さんで食事の質、食事の習慣が違うことが分かりました。

子どもへの影響力が大きい子育て世代、働き世代へのアプローチが重要というのは、先ほどの骨子の中でもお話しさせていただいていましたが、特に男性へのアプローチは、企業等を通じて取り組んでいく必要があると感じたところです。

続いて、7ページです。ヒアリングを行った方全員が、食べることを楽しいと思っていましたし、食に関して大切にしたいこととして、食事を楽しむことと回答した人が最も多かったです。同じく、食に関して大切にしたいことということで、食事を楽しむことと栄養バランスを整えることと答えた人が最も多かったですのですが、それとは別に、市に期待することとしては、健康的な食生活の推進を図ってほしいという意見が多く挙げられました。食事の悩みでは、毎日のメニュー考案だとかバランスを考えて作ることと挙げられた方がすごく多かったですのですが、日々の作業であるメニュー考案や調理について、じっくり時間をかける余裕がない中で、食を楽しみながらも健康でいたいということを皆さんが望んでいるのだなということが見えました。ただ、時間の余裕もない中ですので、負担を感じずに自炊につなげられるように、理想を押しつけず、現実に沿って、簡単かつ具体的な普及啓発が必要だということが分かりました。

食育について、漠然と大切なことという意識は皆さん持っているものの、食育していますかといわれると、何をすればいいか分からない。食育をやれといわれるとすごくハードルが高いと考えている人が多かったです。これまでの会議の中でも皆さんからもご意見を頂いていましたが、食育はすごく漠然としていて、具体的に何をすればいいのかが分かりづらいものです。食育の実践を難しいと漠然と感じつつも、お話を伺うと、家庭菜園で子どもと一緒にトマトを作っていますとか、一緒にご飯を作っていますとか、そういったことをやっている方はけっこう多かったですのですが、ただ、これも食育だとは気

	<p>づけてはいない。食育というのはもう少し難しい、教育に関するようなものだと考えている方が多かったです。新しく難しいことに取り組むのではなくて、今、やっていることから少しずつ広げていけるように、食育の具体的な取り組みや、市民の皆様に実践してほしいことを明確に提示していくことが大切だということが、ヒアリング調査の結果から見えました。これも計画の骨子のところに反映させて作っていきます。</p> <p>アンケートについての説明は以上になりますが、何かご意見等がありましたら、お願いします。</p>
会 長	<p>ありがとうございました。</p> <p>それでは、今日で決定になりますので、アンケートについて気になるところなどがありましたらお願いいたします。</p>
村井委員	<p>内容というよりは、すごく基本的なことですけども、最初の、アンケート協力をお願いのところの文章で、4行目の頭に、「この調査により」というのが突然出てきて、要は3行目までと4行目以降というのは文章の意味合いが少し違うので、「この調査により」はいらぬのではないかと、単純に思っています。段落分けすればいいだけかなと。</p> <p>「ご記入にあたって」という部分で、「本アンケートは、インターネットでも回答いただけます」というのは、いわゆる記入の分類になるので、下のアンケートも一緒に囲ってしまうと分かりやすいかなと思いました。見た目の問題で申し訳ありません。</p>
葛見委員	<p>設問の間10で、答えが「大切だと思う」、「あまり大切だと思わない」、「大切だと思わない」となっているのですけれども、「どちらかという大切だと思う」とか、大切寄りのコメントがもう1個追加されたほうがいいのかと思います。ほかの設問を見ても、問9でいうと、「食べている」、「どちらかといえば食べている」、「どちらかといえば食べていない」と、食べている寄りの答えがありますので、問10はそれが抜けていると思いますので、追加したほうがいいのかと思います。問15も同じ内容で、「大切だと思う」、「どちらかといえば大切だと思う」といったコメントを入れたほうがいいのかと思います。</p>
会 長	<p>ご意見ありがとうございます。回答のところは統一感を出すということですね。</p>
高杉委員	<p>問4-1の、「あなたが、一番最近」の一番最近というのがよく分からないというか、平日の朝食でということ。皆さん、お分かりですか。</p>
会 長	<p>私も、1日のことなのか、何日かまとめて書いていいのか、パンを食べた日とご飯を食べた日もあるけれども、両方つけてしまっているのかと、少し迷ったのですけれども、意図はどちらですか。</p>
事務局	<p>1回の朝ご飯で食べたものになります。</p>
会 長	<p>そうすると、一番最近というのは、その日とか、昨日かも分かりませんが。それが伝わるようにしたほうがいいのかということですね。直近のある日ということですね。少し言い方は考えていただければと思います。</p>
宮川委員	<p>これを出すのが12月23日で、締め切りで1月7日ですね。学校の頭で考えると、冬休み中ということで、家族もそろそろ、家族でながめながらアンケートをやってみようかという、そういうあたりをねらっているのでしょうか。</p>

事務局	スケジュール的に年末年始にかかってしまったのですけれども、ちょうどおうちにいる時間でもあるので、逆に回答しやすいかなという期待も込めています。
村井委員	問 14 の、「あなたは食材を選ぶ際に、身近な場所でとれたものを選ぶようにしていますか」という設問で、身近な場所というのがどのくらい身近なのかというのが分かりづらくて、市内なのか、県内なのか、近県なのか。そのあたりで少し迷いました。
会 長	先ほど説明もありましたけれども、何か意図があるのでしょうか。
事務局	前回の調査と同じ質問の聞き方をしているのですけれども、地産地消と考えたときに、市内産ではなければいけないのかというと、人によってはそういうわけでもないですし、例えば新潟市でも端っここのところにいる人、例えば北区の人が聖籠のものを食べたからといって、身近なものではあるけれども、市内産ではない。地産地消を市内産に限定してしまうと、逆に難しいのかなということで、身近な場所ということで表現しているところがあります。
松井委員	逆に新潟市が答えとして何を求めているかによって、ここは絞ったほうがよくないですか。
坂井課長	新潟市としては当然、新潟市産の農産物を皆さんに食べていただきたいと思うのですけれども、今、春川が申しましたように、そこは非常に悩ましいところであるということであれば、前回の問と同じように、指標のこともありますので、あわせようかなということで、ここに落ち着いたという経緯がございます。
会 長	評価に使うのですよね。
事務局	はい。
坂井課長	市産は今のお話にもありましたので、県内産とかということと言えるかどうかという感じでしょうか。
松井委員	いいじゃないでしょうか。新潟県内産で。
坂井課長	それでは、県内産で。
和須津委員	村部とか町部でとれるものが違うので、海岸部とか、身近なものというと漠然としているので、県内産で括ってもいいかなと思いますけれども。内容について少し聞ける部分があると、逆にいいかなと。ご自分は何を主体に県内のものを、主に何を食べますかみたいな感じのものが少し分かると、その方は、魚は県内のもの、お野菜は県内のものというふうに、それぞれ地域によっても違うでしょうから、そういうところをもう一言つけ加えて聞けるものがあると、県内産というものもピンポイントで聞けるのではないかと思います。
会 長	そういうことですね。事務局はいかがでしょうか。
坂井課長	少し確認させていただきたいと思います。
馬場委員	細かいのですけれども、問 13 で、先ほどもミールキットのお話が出ていたのですけれども、若い方はミールキットで食品ロスが減らしていると思っている方もいらっしゃる時に、ここはどこにつけていいか分からなくて、9番、その他くらいがほしいなと思いました。
会 長	ありがとうございました。選択肢の提案ですね。お願いします。

村井委員	問 17 に「安全な食生活を送るために」と書いてあるのですが、食生活なのか、食事なのか。添加物の問題、あるいは農薬の問題、期限の問題、品質の問題、いろいろとあると思うのですが、あるいは食生活とってしまうと、健康の問題も含めてなので、そこまで大きく括るのか、あるいは安全な食事、いわゆる食育ということで食事を送るためにとらえているのか、その辺が分からなかったのです。
事務局	どちらかという、今、村井委員がおっしゃったように、安心・安全な食生活といえますか、食中毒だったり、アレルギーだったり、農薬だったりという面での、食育というよりはそちらの安心・安全の要素での質問になっていて、この質問自体、私もすごく分かりづらいと思うのですけれども、これも第3次の評価をするための質問になっていて、同じ聞き方をあえて残しています。
会 長	これはどうするかですね。
松井委員	最初に書いているのが、食育に関する市民アンケートですからね。
事務局	安心・安全も食育の一部ではあるので、食育の中での安心・安全のところというような質問の項目にはなるのですけれども、具体的に書きすぎると、回答の範囲を狭めてしまうのではないかと、ここも悩ましい質問ではあります。
会 長	「食生活が」を変えてもいいのですか。
坂井課長	「安全な食事」でしょうか。あまり意味が変わりすぎないように、もう少し分かりやすいものに修正できたらと思います。
会 長	時間も押してまいりましたので、アンケートについては以上させていただきます。次期計画への反映をお願いします。 その他についてですが、委員の皆様から何かご報告などがございましたら、お願いします。 特にないようでしたら、本日の議事はこれで終了いたします。ご議論、ありがとうございます。事務局にお返しします。
司 会	村山会長、議事を進行いただきまして、ありがとうございます。皆様も、限られた時間の中でボリュームのある議論をありがとうございました。パブリックコメントについては、成案に近い形で市民意見を募集したいと思いますので、皆様のご意見をお待ちしています。よろしく願いいたします。 最後、連絡事項です。3点ございます。1点目は、会議の報酬になります。こちらについては前回同様、指定口座に後日振り込まさせていただきます。2点目は、次回の会議の日程についてです。次回は3月中旬ごろを予定しております。計画完成前の最後の会議となります。後日日程調整させていただきますので、よろしく願いいたします。3点目は駐車券になります。会場にお越しの皆様は、無料の券と一緒にテーブルに置いてありますので、忘れずにお持ちください。 以上をもちまして、令和3年度第3回新潟市食育推進会議を終了いたします。お忘れ物のないよう、気をつけてお帰りください。お忙しいところ、ありがとうございました。